



グレートヒェンをどうとらえるか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヘラー, ペーター, 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010046

グレートヒェンをどうとらえるか

ペーター・ヘラー
星野純子 訳

私はこれから挑発的な試みをしようとしているので、あの自明のことをことこまかにくり返すことは出来ないのだけど、なんととってもグレートヒェンを純粋なドイツの少女たちの真髄であると見なしていたある世代に属しているし、又、このドラマの人物にこれまでできるほどくり返されてきた伝統的な理解はたとえ彼女をステレオタイプへと硬直させるのに大きく貢献したとはいっても、やはり私もあの自明のことを疑問の余地のないこととして承諾しているのである。私が言っているのはこの人物の優雅な純真さ、無邪気な官能性、シュタイガーの言を借りれば「筆舌に尽しがたいやさしさ」¹⁾ のことであり、あきらかに豊かな母性愛をもつように定められていた存在²⁾ が破壊されてしまうという悲劇、官能的な情熱——これは西欧のミンネの伝統の中では勿論、長い間、似而信心的に詩的に美化された、いわば背徳的な礼讃を享受してきたものであったが——の結果、彼女の本質が逆に人殺しへと転倒してしまうことである。そして何といっても最後には——ヒルデガルト・エムメルはこれを確かな筆致で描いてみせてくれた。³⁾ ——あの情熱的な罪に迷いこんだ女がもつれをときほぐして浄化し、自分の罪と本質をはっきりと自己告白し、それによりついに、変容した超感性的な立場にたつて悔い改めた女として、新たに獲得した天国への志願者のために聖母のもとで仲介の労をとることが出来るようになることである。こういうことになんの矛盾もなく共鳴してしまう私の気持は、例えばモダンな考え方をする女子学生たちによくうけあってやることだが、我々はいつも歴史的にものを考えること、だから、過去の時代の理想型をも理解することを学んできたのだと考えることで、なるほど少しは楽になるかもしれない。教養あるドイツ人はフェウストのタイプよりはむしろ、ワーグナーとメフィストレスのあいの子を演じているのでグレートヒェンたちは「もはやほしがられない」、それ故に死に絶えたと、ニーチェはすでに1870年代に確認しているのである。⁴⁾ もっともそれでもよくあるように、グレートヒェンという

理想はまだしばらくの間続くのだが。それにしても、あの陳腐な型にはまったグレートヒエンのようなタイプの女の子にせいぜいのところ観念的イデオロギーとして照準をあわせているにすぎないドイツの男性に、何故にまたこんなにあとになって立ち向ったりするのだろうか。あのアンナ・ハレーによれば、⁵²⁾ ⑩ 自分の妻を年をとると「かあさん」と呼び、青年時代には「子供」で呼びかけるような、「なんといっても子供は子供だし、遊びは遊びなんですからね」とメフィストも言っている。〔2737〕権威をふりかざすくせに、女房の尻にしかれている、あのドイツの亭主どもに反抗したりするのだろうか。あるいは、あの規格化されたグレートヒエンという理想型とうまく結びついたり、ともかくも簡単にまぜあわせることのできる「二重基準」^⑪ に自分たち自身がまだいくらか関与しているので、結局のところ自分たちには異議を申し立てたりする気はないのだとみな思っているのだろうか。（何しろ誘惑された「善良な少女」が思い煩っているのにファウストはブロッケン山で若い魔女たちとうさ晴らしをしようとしているのもなんら偶然ではないのだ。これをすべてのとがは悪魔にあるのだという風に安易な指摘をすることでかたづけしてしまうことはできない。）

いや、私はある人物の限らない女性らしさはまだ自明のこととして感嘆せずにはいられないし、否定してしまうつもりはないのだ。こういう、よるこんで愛に身を賭したり、根本的に受動的で耐え忍び、我が身をかえりみずに献身できる情熱の神格化である女性は、なるほど、攻撃的でいわば自分たちの男らしさに固執している解放的な意識のレスピアンにとっては憤激のまとなるかもしれないが、（もし彼女たちにとっても魅力があるのでなければの話だが）私の時代には、まだおそらくは理想型の地位を占めていたのだ。私はただ、その他の、ここで話題になる規範という意味で低級と見なされている諸局面を指摘したいと思うのである。この面はなるほど、全く誤解されてきたというわけではないし、ましてや効力がなかったわけでもないだろうが、陽のささない裏面として——まさにそうすることが、芸術においても生活においても非常に有効なのかもしれないのだが——ほとんど話にのぼらず、しばしば道学者ぶった俗物的な意図から、特にゲルマニストの先生方は沈黙するか、観念的で大げさなことばを使うことで、程度の差はあれ、輝かしい霧でおおいかくしてしまっていたものである。

先に述べたような「低級なこと」にも通じている「研究」がその際、どんなふるまいをしたかは注目すべきである。進んでそんなことをするほどばかだったというわけ

ではない。むしろ、めくらのふりをしていたところでも、やはり——低められたりあるいは高められたりした——女性とか、官能性とかについての二元論的ならえ方や男性の幻想に手を貸していたのであり、またこういうらえ方は確かに、ファウストにとっても、そしてこれから詳しく述べるように、ゲーテにとっても無縁ではないのである。あの、人のよい、クノ・フィッシャーは『初稿ファウスト』には「とてつもなく」へどの出そうな「自然主義的な」言いまわしがあるといつて、さわいでいる⁶¹。「私のひぎは、まあ、あの人の方へおしよせていく。」後にはこれは和らげられて「私の胸」と変えられた。そしてさらに、「ああ、あの人をしっかりと抱いて、思う存分に口づけしたい、たとえそのために私の身は消えてしまおうとも」といううたからトゥルンツは、——彼はファウストのことばは「男らしく、ぐいとひきよせ、はりさけんばかりのあらあらしい情熱」であると認めながら、グレートヒェンのことばについては「あたかも民謡のようであり…女らしく、まるやかで、深い情に満ちている」と言っている。——次のように、宗教についての対話への橋わたしをひき出したのだった。「グレートヒェンのモノローグの最後は、愛における忘我だった。ここでは人間は、ただ、『私』とそして『あなた』という最高の宗教的審級の前に立っているのである。それ故にまさにこの時に——前の場での準備の後に、次の場での出来事の前に——宗教の問題が出てくるのである。」⁷²グレートヒェンを苦しめるエロティックな不安、あふれ出し、我を忘れさせる性的な欲望のことを「準備」ということば——そして後の場面で並べられる性交渉をみさす「出来事」ということば——が理解できる、註釈の注意深い読者に対してはなるほど黙っているのではないけれど、手品でかくしてしまうのである。——そして、これは勿論、エロティックなものをいわば敬虔主義の宗教的熱狂にまで、実際、世界の神聖化にまで高め、揮発させ、天上化するというゲーテ自身の傾向、たしかに全く世俗的というのでもないし、真に神聖だというのでもない欠点を持っている、あのゲーテの傾向に依存しているのである。

今述べたように、ゲーテに依存しながら、またゲーテ以上に、トゥルンツは、ワルプルギスの夜の場面のエロチシズムをまさに、象徴的に非現実的に取り扱うことを考慮して、（彼はファウストのエロチシズムとさえ言っている⁶³のだけど）ゲーテが、エロチシズムにおいて「控え目な態度」を持っていることを認めたのだった。そしてそういうとき、恐らくトゥルンツは、「ドレスデンのお尻マツ」とか、「けつだし野郎」とか、「お尻坊や」「穴王」「豚のチンポコペーター」などなど、いくらでも

あげられるが、⁹⁾ こういう一連の名前の登場する『ハンスヴルストの婚礼』の若きゲートテや、あるいは、グレートヒェンに思いこがれて自慰にふけるファウスト (3290—3296) に言及した個処のことを考えるよりは、「今日、私はひどい夢を見た／そこには裂けた木があった／それには恐しい穴があり／大きいけれども私の気に入った」とか、なかでも特に、年よりの魔女の答えた、「正しい栓の御用意をなさいませ／もしその大きな穴がおいやでなければ」¹⁰⁾⑧などの美的な詩句のことを考えているのである。

ともかくも、近年を代表するトゥルンツのファウスト注釈は、人物をなにものにも縛られない——(ただもう詩的な)——魂のこもったものへと無害化し、和らげるのを助長したということにおいてぬきんでているという印象をうける。例えば杜松の木のメールヒェンからとったグレートヒェンのうたについて、トゥルンツは「以前にもうたったように牢獄でもうたう」グレートヒェンにふれるまえに、いずれにせよゲートテによって先取りはされているが、全く、後のロマン主義者のメールヒェン受容にとってのみ重要なことをいくつか話すべを心得ているのである。「彼女は、メールヒェンに出てくる、殺されて骨が一羽のおそろしい鳥にかわった子供のうたをうたう。ここでは体験したこと、子供らしいこと、魔術的なもの、童話めいたものが何とまざりあっていることだろう。分別のあるいかなる文も、狂気がつかんだ形象とひびきとのこれほど純粋な象徴性にまでは届き得ないだろう。」¹¹⁾しかし、この説明から歌の意味がいくらかでも明らかになるだろうか。「わたしの母さん 浮かれ女で／わたしを殺してしまったの／わたしの父さん 悪者で／わたしを食べてしまったの／わたしの小さな妹は／お骨を拾ってくれました／お墓は冷たい土の中／けれどもわたしは美しい森の小鳥になりました／そしてあちらへとんでいく。」(4412—4420)。だがしかし、注釈者たちには多分、なぜグレートヒェンがこのうたをうたうのか、自分の罪をはっきりと認識する少し前に、完全に自覚しているとはいえないけどきびしく自分に判決を下しつつ、同時に、ただほかの人が、「みんなが」(4488以下参照) 彼女のことをうわさしているだけなのだと、なかば自分に説きふせようとしながらグレートヒェンがこのうたをうたった理由はわかっていたのだ。¹²⁾つまり、グレートヒェンは殺したわが子と自分を一体化し、その子の名において自分の子殺しの罪を、¹³⁾そして殺された兄の名において娼婦であることの罪を責めるのである。

ところでまた、性の、そして性の悲劇の領域に属するモチーフだけが切りおとされ

ているのではなくて、まさに社会的な文脈、つまり同時に物質的状況のモチーフも切り落とされている。悪魔が構想の中で女たちに向かってこう言ったのは理由のないことではない。「おまえたちには二つのものがある／みごとな輝きをもった／光る黄金／そしてすてきなしっぽ」⁴¹そして、黄金やお金といっしょに、偏狭な社会環境のモチーフ、きゅうくつな身分意識のモチーフが、おさえつけ、おしつぶすものすごい力として、示されるのである。すなわち、これは庶民社会のやさしくつつましい生活の陰の面である。

民族、人種、階級、身分などの境界領域では、他者が近くにいる、混合と階級低下の危険が大きいために、自己意識や身分意識は往々にして先鋭になる。これに反し、距離の大きいところでは、寛容であること、あるいは自分が寛容だと見なすことは容易である。グレートヒェンはあらゆる点で緻密にきっちり閉じられたきちょうめんな小市民的身分意識を持っている。その道徳性には、まさにあるちょっとした魅力がそなわっていて、いわばたえず自分で自分のあり様、行動、ふるまいを定義づけ、限定し、正当化しなければならないと信じている。しかもそれは下に向かって、つまり、まともで財産もあり、定住している市民の意識ではまさに身分にふさわしくないとと思われる人たち（無産者、下僕、女中、奉公人、ならず者など）に対して境界を設けるために下に向かってなされると同様に、上に向ってもなされるのである。身分以上のものに見られたいという、つねに魅力的ではあるが、つねに危険な誘惑を断固として避けるために、上に対して、つまり高い教養のある——特に裕福な——市民と上流の身分、即ち、少なからず畏敬の念をおこさせる貴族に対してもなされるのである。

最初からこのラヴ・ストーリーでは身分意識がグレートヒェンにもファウストにも同じように重要な役割をはたしている。ファウストにあっては明らかに、いやしい生まれの女の存在がもつ魅力に対する好みが作用しているが、これは社会的優越性と懸隔によって強められている。そしてちょうど逆に、グレートヒェンには、ファウストが自分より社会的に高い層に属しているという印象が、社会エロスの魅力をもってしているのである。グレートヒェンは最初のせりふで、あからさまなお世辞を含んだ貴族の令嬢に用いられる呼びかけを拒絶している（2905以下）し、またあとでメフィストフェレスに向かって、自分を貴族の令嬢とまちがえないでくれと強く言っている（2605以下）。これはグレートヒェンにとって上に対して自分を限定するのが大事だということを意味するのではなく、彼女は、自分が自分の属する身分をこえたいと熱望し

たり、あるいはごまかしてまで自分が身分のある女だと見せたがっているなどと疑われることのないようにしているのである。せまくて陰気なドイツの田舎町に生まれ育ち、「（「まがりくねった小路、とがった破風／せまくるしい市場、キャベツ、かぶら、玉ねぎ」 18138 以下参照）おたがいになべの中までのぞきこむような近所の人たち、みだらでわいせつで意地悪く、自分だけが正しいかのように他人の評判をこきおろす娘たち（泉の場面）にかこまれて、グレートヒェンには、まさにあの市民としての評判がどんなに大事かがよくわかっているのである。ヴァレンティンの話や、後のグレートヒェンが恥辱に対して抱くおそれのことを考えると、それがほとんどすべてなのだと思えるほどである。だからグレートヒェンには貴族の令嬢のように呼びかけられることを拒絶することだけが大切なのではなくて、まさに善良な市民という評判の圏外に、あるいはそれより下にいるものと混同されるのが問題なのである。¹⁵⁾

復活祭の場面の学生は手軽な恋の相手をさがしているのだから、市民の娘には目も向けず、「土曜日にほうきを持った手が、日曜日にはおまえを一番やさしく愛撫してくれるのだ」（844 以下）と言う。グレートヒェンは、週日には自分で上手にほうきを使い、床を白い砂で浄める(2706)のだが、すぐにどうにでもなると思われている(3174)あの行儀の悪い軽薄な娘たちとはちがうのだと、ファウストに向って断言することを大事だと思っているし、その上彼女は、非常にきっちりした母親の経済的事情について(3114, 3084)母親からいつけられる家事をやることは——グレートヒェンはそれを上手にやつてのけられるのだけど——本当はそんなに必要ではないのだと強調するのである(3109以下参照)。女中をやとおうと思えば、やとえるし、そんなに切りつめる必要はないんですよ、と。だからこれらのことでは、グレートヒェンに往來で大胆にお嬢さんと呼びかけたことの中にある社会エロスの卑下に言及することが目的であり、またグレートヒェンが社会的経済的身分序列について説明することになったきっかけは彼女の手でファウストがキスしようとしたことなのだから——彼女は出来るならそうはしたくないのだけど、自分でほうきを持たねばならない娘たちの一人なので、自分の手はきたなくてざらざらしている(3082)、つまり、令嬢の手、貴婦人の手ではないのだと言う——だからあとからみると、ファウストの最初のお世辞、身分を高めた呼びかけも適切に見えるのである。この呼びかけをなるほどマルガレーテはことわるが、彼女がまんざら望んでいなくもない身分上昇を誘惑的にほのめかしているのである。更に、最初、この小市民の娘の目に、ファウストが偉い人であると

映ったことは——少女に強い印象を与える肉体的外観とともに——このことに照応しているのである。「あの方は本当に堂々としていらっしゃるわ／きっといい家柄の方なのだわ／あの秀でた額を見るとそれがわかるわ／でなければあんなに思いきったことはなさらないわ。(2680—2683)」

社会的身分のモチーフには、だがしかし、贈り物や装飾品、黄金やお金の価値という複合モチーフがわからがたくからみあっている。それにグレートヒェンに投げつけられる売春婦という非難もこの面を狙っている。ファウストがグレートヒェンを買ったのだという人はいないだろう。しかし装飾品は単にはじめからそこにあったのではない。もしファウストとグレートヒェンの関係が進行していく中で何らかの機能をはたすこともなくただそこにあるだけだとしたらそんなくたらないことはない。それにメフィストが最初の小箱について、「侯爵夫人も手に入れられるようなものが入っていますよ」(初稿ファウスト587以下)というだけではなく、小箱はマルガレーテの心にただちに高い身分だったらなあという思いをよびおこすのである。(「りっぱな装飾品ね、こんなをつければ、どんな身分の高い貴婦人でも／どんな晴れがましいお祭りにも出かけられるわ」〔2792以下〕)。さらに、この装飾品は彼女の世界を支配するあらゆるもののほんとうの力を表わしているのだという悲しい認識をもよびおこすのである。(「なんととってもみんなお金に群がり、お金に執着するのね」〔2802—2894〕)。それには若さも美しさもかなわない。少なくとも注目に価することは、グレートヒェン自身のことによると、あまり自由はないけども悪くはない境遇にいるこの小市民の娘には、もし自分が金持の令嬢になりたいというのぞみを持っているのであれば、黄金の力につながる、「ああ貧乏人はつまらないわね」という叫びを発しなければならぬ、なにも確かな理由は持っていないということである。(それにマルガレーテが先にうたったあの王の側室を讚美するうたもそれを証明している。)

くり返して言うが、自分の狭苦しくとじこめられたような身分をこえて豪華できらびやかな豊かな生活へ入ってゆきたいと、社会的物質の上昇への夢をいだかせることで誘惑するというモチーフは、得もいえぬ誠実さにもかかわらずこのラヴ・ストーリーの上に、また内部で、やはりその役割をはたしているのである。最初の宝石箱、——メフィストのことばを信じるなら、グレートヒェンの願いに反して母親が坊主に渡してしまった小箱はもうない。二つ目の小箱、グレートヒェンはその宝石を身につけて外を歩いたりできないのが残念でたまらないのだが(2883以下)、この小箱について

は、彼女も、非常な無邪気さにもかかわらず、ある男が彼女にくれたのかもしいという疑いはいただいてもいいのに——買収に対して純真にもよることで応じようとしていること、つまり自分の動機について無知でもよいというのは無邪気さうぶな少女たちの長所なのだろうか——ともあれ、この二つ目の小箱を、グレートヒェンは母親には内緒にして、とりもち女といった型にゲーテが様式化したマルテのもとへ運んで行くのである。しかし今や、宝石や黄金はその輝きと雰囲気^{アウフ}で、富や高貴さに対してまやかしのあいまいな希望をいだかせるという機能をはたしたのだから、それから先のことは情熱のなりゆくままに、官能的でもあり超感性的でもある求愛者とこの少女とにただ任せておけばよい、宝石についてはもう語らなくてもよいと、考えられるだろう。ところがまたもや、人のよいクノ・フィッシャーにとっては腹立たしいことなのだが、ゲーテはこのモチーフをしっかりとつかまえてはなさないのである。グレートヒェンは男のために、母親を眠りこませ、身ごもり、人々のうわさのまよになり、聖母像に花をそなえながらその前で「お助け下さい、マリアさま、わたしを恥辱と死とから救い出して下さい」（3616）と祈っている。ところがファウストは恋人を飾ってやる新しい装飾品のことを考えているのだ。（「贈り物をもたずに、あれのところへ行くのはつらいからな」）。メフィストが、「あなたがただでご馳走になるようなみじめな目には決してさせませんよ」（3671—3677参照）と答えるのはもっともであるが、フィッシャーはこう言っている。「はかり知れないほどの悲しみの中にいるグレートヒェンが贈り物や宝石をよろこび、なぐさめとなるはずだというのは織細さの欠けた子供じみてナンセンスな計画であってファウストの性格からもグレートヒェンの性格からも説明がつかない」。しかし、この計画はたしかにゲーテらしいやり方なのである。ゲーテは1771年6月にフリーデリケ・ブリオンとの関係を解消するとき、友人のザルツマンを通じて、シュトラスブルクに「二ポンドの砂糖菓子」を「彼の周りの悲しそうな顔をした人たちを明るくするために」贈らせたのだ¹⁶⁾。

グレートヒェンの兄は彼女のことを売女（Hure）^{ばい女}だと言う。このことばは、当時、特に中層、下層の市民では、道徳的に処女性が尊重され要求されていたので、単に少女の純潔の喪失、生娘でなくなること、特に乱婚をも指すことのできるはっきりしない多義的な概念である。しかしまた、——リースヒェンがとがめた、以前は「お高くとまっていた」今は妊娠して捨てられたバルバラの場合と比べて見るとよい。彼女は「男から物もらうのを恥しいとも思わないほど、根性がくさっていた」（358以下）

——この概念はいつも、金銭で買えること、売笑、本来の意味での売春のようなもの、だから、今日、このことばが正しく通用する唯一の場であるあの領域をも内包している。もっとも今日でも多少誰とでも恥知らずにねたりする少女たちはその代償に金をもらったり物をもらったりしなくとも、時には、売女のような (verhurt) といわれることはあるが。

そもそもあのしっかり者で品行方正で無骨者のヴァレンティンはその愛國的な融通のきかない頑固さの中に、片意地で独善的で偏狭な小市民の道徳システムを確固としてまとめあげているのだが、この道徳システムを結局のところはグレートヒュンも——たとえ自分を罪においやったものが、すべて「とてまたのしく」「とてもうれしかった」(3586) と言っているにせよ——そのまま受け入れているのである。特にグレートヒュンはそのほかのことは何も知らないのだから。「りっぱなほこらしい軍人」(3775)であるヴァレンティンの視野の狭さは、広い世界へ出ても、身分への忠誠という目隠し皮が自分に見ることを許してくれたものしか見ることの出来ない下僕根性のせいである。グレートヒュンの偏狭さは、むしろ、伝統的な家庭内での女に対する抑圧的な教育が産み出したものであり、だから特に少女たちにおおいかぶさっている、あのフロイドが性抑圧と関連づけた、思考力の禁圧とかかわりがある——これに対してメビウスは女性の「生理学的愚鈍さ」ということを述べている。^{17)④}——そしてその典型通りの表現としてあるのが、たとえばグレートヒュンがもう強調しすぎるほどに幾度も自分の無知と内気さを確言することであり、「まあ、私はだってばかな憶病な女ですもの」〔2758〕とか「私なんかあわれな何も知らない子供ですもの」〔3215〕、すぐれた男性の知性に対して驚嘆することである。「まあ、ほんとうにああいうお方はなんでもちゃんと、わかっていらっしゃるんだわ。」〔3211以下〕

だがグレートヒュンには、おしゃれしたいという欲望から半ば無意識、半ば意図的に生じる思慮のなき(贈り物を受けとる時の)とか、欲望のせいですぐに信用してしまうこと(睡眠薬を渡された際の)とか、無力さ——単なる恥辱よりはるかに悪いこと、つまり子殺しが唯一の逃げ道であるように思ってしまうほどの極度の不安(牢獄の場における殺人の場面の描写を参照)のために全く出口のないところに追いこまれたものにはそういう無気力さも充分に推測がつくだろうから——などは考慮に入れないとしても、知的な偏狭さ、鈍感さ、愚かさ、部分的あるいは一時的な精神薄弱とかたく結びついた道徳的な偏狭さ、愚かさ、鈍感さのようなもの、だから一種の道徳的な精

神薄弱がありはしないだろうか。こんなことを云うと、それは少女を子供のようにたよりなく無力なものへと教育した当時の少女教育のみならず、あらゆることを忘れさせてしまう情熱の病理学を考慮に入れていないという反論があるかもしれない。それでもやはり——ついでに言うと、ゲーテにおける他の多くの女性像、エグモントの誇り高いクレールヒェン、理知的なロッテ、やさしいフリーデリケ、『ゴットフリート・フォン・ベルリヒンゲン』のデーモンに駆りたてられるアーデルハイト、高貴なイフィゲーニェ、『タッソー』の女性たち、情熱のさなかにも明澄なズライカなどとは対照的に——グレートヒェンはニーチェがちょうどあるアフォリズムで扱っているように非常に軽蔑に値するような姿で現われるのである。ニーチェはそのほかのところで、「未熟で、精神的にはとるにたらない卑屈な民衆の小娘愛好趣味。」¹⁹⁾のことを軽蔑して語っている。引用：

ファウストのイデー。小さなお針娘が誘惑され、不幸な目にあわされる。四学部のすべてに通じているひとりの偉大な学者がその犯人である。それはただごとではないらしい。そうだ、全くその通り。悪魔の化身の手助けなしにはそのえらい学者もそんなことはやりおせなかったろう。ところでほんとうにこれが、ドイツ人の間で言われているように、ドイツ最大の「悲劇的な」思想なのだろうか。ゲーテにはしかし、この思想すらもあまりにもおそろしいものであった。彼のやさしい心はこの小さなお針娘、「一度だけ我を忘れた善良な魂」を不本意な死のあとで聖女のそばにうつしかえざるを得なかった。実際、この偉大な学者をさえ、ゲーテは決定的瞬間に、悪魔に一杯くわせて、まだ間にあううちに、この「暗い衝動」²⁰⁾をもった「よき人間」を天上へ運んでいくのであり、天上で恋人たちは再会するのである。ゲーテはあるとき、ほんとうに悲劇的なものに向うには自分の性格はあまりにも宥和的にすぎたのだ、と言っている。¹⁹⁾

ニーチェはそれにも拘らず、なお生涯、ファウストと自分を同一視していたが、——勿論それはゲーテのファウストよりはもっと大胆なファウスト、バイロン風もしくはそれ以上のファウストとであるが——ここではファウストもグレートヒェンと同様に容赦されていない。

我々はしかし、グレートヒェンの陰の面を追求しているうちに、最初自明であると主張してきたこの人物の正の面の価値を認めることから非常に遠くはなれてしまったということを考えてみたい。これはどうすればうまく、均衡がとれるのだろうか。そ

れは明らかに、光と影から合成された二重性格という外観を是認すること、つまり男の二重基準と二律相反性に照応し、また実際、それが要求し、また時折組み立ててきた、「低い」局面と「高い」局面との共存をまさにはっきりと是認することによってのみ可能なのである。

ファウスト自身、低い感覚的なものと、気高い天上的衝迫との間を揺れる二つの魂の葛藤²⁰⁾について、また同時に、彼自身の二重基準について語っている。これをプレヒトは、ファウスト的市民精神に対する諷刺の中でさらにこう説明している。「高きもの、低きもの／粗野なるもの、愚直なるもの／二つながらにもつべし。」^[21] プレヒトはこれを、低俗で物質的な、しかし、現実的な搾取と、高く、理想的、空想的な人間性——これはほんとうは低い現実を輝かしいヴェールでおおうのに役立つのだが——という二重性格に対応する上部構造現象として、幾分単純に、俗流マルクス主義的に解釈するためにこう説明したのである。『ファウスト』の中で美的構成原理としても機能し、あらゆる分野、あらゆる形で姿を見せる二元性と二重基準を——たとえば次のような一連のものを考えてみるとよい。ファウストにおける相反する二つの魂の葛藤、ファウスト・メフィストという相反するものの二元性、ファウスト・マルガレーテにメフィスト・マルテを対位法のように配置するという相反的二元的な場面のとりあつかい方——社会的な領域から（プレヒトの解釈の図式が薦めているように）、また哲学的形而上学的領域から（例えば両極性の形而上学のように）、あるいは性の二元性から派生していると考えるかどうかはおそらく解釈者のイデオロギーにかかっている。いずれにせよ、ファウストに係する女性のイメージの二重的様相は、ファウストの二元性に照応している。そしてそれは単にファウストの内部にも働き、ファウストによって精確に追体験される二重基準という伝統的な図式が男女のエロスの葛藤にあっては、次のような経過をたどるように決めてしまっているということを意味するだけではない。伝統的な図式からいうと誘惑者は、——「気のきいた若い男はいつも自由よ」（3571以下）——欲望のまだ満たされない段階では、崇拜し、「天使」と呼びかけていた「永遠の」恋人(3163, 3191—3194)を、手に入れてしまったあとは、もし自分がばかだと思われなくなければ、彼により、また客観的にもはずかしめられた娘として見捨ててしまい、悲惨と恥辱とにひきわたすことになる。（「あの子がはじめでというわけじゃありませんよ！」〔陰鬱な日〕²²⁾）もっとも、彼がそのために、野バラのバラードの中の少年のように、終生、いたみと良心の呵責と悔いを感じるとして

も。(ついでに言っておくと; ファウストについては、本当はこういうことも主張出来ないのである。) ということではなくて、もっと重要なのは; グレートヒェンの性格にも、この二重性に照応する諸特徴が書きこまれていることである。それは勿論、グレートヒェンがファウストを見たり、判断したりする方法と純粋には切り離せない。それは、「しとやかでつつましく/そのくせどこかつんとしている」(2611以下)という並列のような小さな緊張にすらさきやかであるが確かめることができるだろう。先に非難した偏狭さと愚鈍さを考えればもっとはっきりしてくる。審美的な点では、グレートヒェンの長所はナイーブな優美さではないだろうか。そしてこのナイーブな優美さ²³⁾を遂行するには、ファウストがはじめてグレートヒェンの部屋に足を踏み入れたときに彼を魅了し、いつも荒涼としてやすらぐことなく定住することのできない我が身とひきくらべて称揚していた、あの小さな領域を純粋に充実させること以外には恐らく不可能なのである。そして、この狭さのもつ倫理的な長所は、「めぐみ深く、すべてを分ち与える自然の最高の贈り物である謙遜や卑下」(3104以下)ではないだろうか。「ああ、無邪気さや、無垢というものはちっとも自分自身を、自分の神聖な価値を知らないのです。」²⁴⁾(3102以下)。それらはファウストが力をこめて強調し、ほかでも時折、グレートヒェンの美点をほめるときに示した特徴である。そしてそんな時、たいていはメフィストが口にするだけだが、ファウストも決して知らないことはない「なまいきな子」(3511)についての反対意見をかき消してしまうようなこともおこったりするのである。彼女の知的な狭さ、世間的な知識や思慮に欠けること(3100以下)、そしてまた、メフィストによると、男がおとなしく頭を下げるかどうかが気になるのでファウストにカテキスムの試験を試みるような、教会に対する保守的な信仰(3522--3527)などの長所としてあらわれるのは、本能的に働く、善悪に対する「女らしい」直感の確かさであり、これは経験豊かな男性の知性に勝るかもしれない。だから彼女はたとえばファウストの告白にだまされないし、「あなたはキリスト信者じゃないからよ」〔3468〕、メフィストテレスが宿命的に愛の不可能な存在であることもはっきり知っているし、また牢獄の場の最後では、著者の考えでは、自分とファウストの立場の本質について決定的な洞察をもつようになるのである。さらに結局は、グレートヒェンに個有的すぎた愛の能力も、ある一人の人、ひとつのものへ固執し限定することと結びついた誠実さの実証の中に現われるのであり、「男性的」知性と行為衝動がもつ、さまよい歩く、攻撃的な好奇心とは根本的に一致できない。

最終的に人間の価値を決定するのに大きな役割をはたし、また他人のために、他人に自分を捧げるという大きな愛の能力には、しかし、無力さから出てきながら、これに匹敵するほどの女性の優越性がひそんでいる。それは、特にグレートヒェンのようになるほど悪魔の道具としてあらわれるけれども同時にここで——ここに限らないが——話題になっている二律相反的なシステムの中では、男を救済し、上へひきあげる、永遠に女性的な神的な愛の力の具現者として姿をあらわすのである。

グレートヒェン像の二律相反性——ここでは低いものがすなわち高いものであるとでもいうように肯定的な意味あいを用いているのだが——はファウストが特に好んだあの、グレートヒェンの女性らしい本質を示すいろんなシンボル、つまり、グレートヒェンの住まいの「牢獄」の中に「幸福」があり、「小屋」が天国になる(2694,2708)などの象徴にもあらわれている。女はなるほど、パウロ婆さん[®]であり、魔女であり、娼婦であり、妊んだ牝豚であり穴であるのだが、他方、あるいは時には同時に天国でもあるのだ。ファウストの努力は、牢獄、ねずみの穴、狭さへの反抗であり、受け身で無気力な怠惰さやほこりをくらう地上の蛇に転落することへの反抗であった。それはまた、地上的原理へひきずりおろそうとする女性的原理への反抗であると同時に、願望のかなえられる瞬間に向って憧憬の念を抱きながら努力することである。この瞬間は架空の職人的芸術の領域では、ヘレーナの牧歌の中で、そして勿論、もっと決定的には未来の共同体との融合を先取りすることの中に、しかし彼岸のないこいととして、神秘的、超越的には変容したグレートヒェンと天の母との面前で到達されたように見える。

このように、ファウストの宇宙もまた、女性的なものを物質的な低さと、崇高な気高さという相反するものとしてとらえる評価と一致して構想されている。神秘的な「母たち」は永遠のプラトンのイデー、あらゆる本質の原像とかく結びつけられてきた。その「母たち」の領域には、手にすると大きくなり、火花を出して、正しい場所をかぎつけてくれる鍵を持って足ぶみをしていると到達できる。他方、ここは、「魔女の厨のにおい」がし(6229)、話題になるのは、空虚さや無であり——そのすまいへは「地の底へもぐっていく」(6220)がよいとメフィストは言う。——形のないもの、まだ存在せず、もはや存在しないもの、特に、ちょうど形を作ったり、形をかえたりしつつあるイメージやその形体化などのぞっとするほどおそろしい領域である。そしてあらゆる事物をはらんだ暗い胎内であると同様、あらゆる事物のイデーや

形態の、無形であかるい、いわば抽象的なみなもとであるこの国にも——母たちの国は上の領域と下の領域であるともみなせる。(メフィストは「沈んでゆきなさい、いや昇ってゆきなさいと言ってもよいのだが」〔6275〕と言っている。)——女性的なものの二重原則が働いているようだ。つまり、母 (mater) は暗く混沌として形をなさない低いものである物質 (materia) としても働くし、また理念的な母胎 (Matrix) として精神的な形、観念、理想形としても働く。これにはキリスト教の天国ではマリアの領域——もっともマリアの領域はそれ以上のものだけど——つまりアガペーの領域が相応する。さてしかし、多様に解釈できる母たちはわきへのけておくとしても、『ファウスト』にはドイツ文学に広く普及している性の神話の痕跡が見られるというのは妥当である。これによると能動的な創造精神は男性的であるが、カオスや空虚さ——「光を生み出す闇」(350)——は最も下にあるもの、低いものとして男性的ではないし、原像、プラトンのイデー、そして理念的に完成することにより詩人に靈感を与える形態も男性的ではない。事実、ゲーテにあっては、ミューズの神、特に詩人が詩のヴェールを手渡してもらふ真実は、理想的な女性の姿をとるのである。²⁵⁾

ことばに対する作家や詩人にとっての——彼らにとってばかりでもないが——決定的な関係は、いわば性化された、つまり、性的差異という意味で象徴的に解釈されたものであるという洞察は、ゲーテ時代にその伝統の基礎を置いている文学においても、またファウスト詩の解釈にとっても非常に実り多いことは明らかになるだろう。レッシングは、神学論争の中で次のように言っている。「概念は男であり概念の感覚的なイメージは女である。そしてことばは両者が生みだす子供である。イメージやことばとは闘いをまじえるのに、まるでいつも概念が見えないかのようなふりをしていると結構な勇士だ。」²⁶⁾ ここでは、この知的戦闘をおこすことになった原因がそう要求しているのであるが、概念の男性的優越性が主張されている。もっともレッシング自身は、作家および戯曲家として自分をきわだたせている遺伝的な欠陥、いわば彼の様式の原罪ともいべきものは、感覚的なイメージによって誘惑されやすいという性質の中にあるのだと強調している。²⁷⁾ 反合理主義のシュトルム・ウント・ドラングにおいては、そして勿論、ゲーテにひきいられた文学の世代にも、また一般にゲーテの時代には、イメージや、メタファーが、また、感覚的な形姿が尊重されるようになった。それは、創造的ファンタジイの、実際、美の領域、濃い密な溶質の中でまぜあわされ、まさにそれにより色彩豊かで精神的になった光の領域²⁸⁾ ⑩に一致しており、ま

た、たとえ、真理の女神の手から受けとろうとも、詩歌のヴェールにも相応しているのである。すでにレッシングは、精神的な真理はただ、神のものと決められているのだから、これを所有するのはあきらめるべきであり、たとえ誤謬と結びつこうとも真理への努力の方を選択すべきであると信じていた。²⁹¹しかし、——カントも言うているように——真理自体は到達出来ないものであるなら、ともかくも理知的な感覚的象徴的な形態、色彩豊かな反射光が、最高の近似値を手に入れることになるだろう。古典的一ロマン主義的ゲーテ時代の末裔であるホーフマンスタールは、形態がはじめて、問題を解決するのだといっている。観念的な時代にとってはなるほど、「ただ偶然に」物質的な現実を「ただ感覚的に」描写することは低俗なものにとどまるだろう。——ちょうどそれはただ感覚的なだけの女性の低俗さに似ている。——低いもののみところから理念的なものへのぼっていきこうとつとめる、精力的でダイナミックな、また弁証法的な男性的精神がより高い努力であると見なされるのである。しかし、特に詩人にとっては、——そして絶対的なものの開示をあきらめたあとでは詩人にとってだけでもないのだが——まさに我々は生と世界をただ反映の中にのみ、真理を反射光の中にのみ、虹の中にのみもっているのだから、男の精神的努力の最高の、そしてまだ表現可能なまた観察可能な目標はやはりまたもや、あの像の中に、つまり、詩人が精神化し、崇高化し、いわば超感覚的になった、しかしそれでもなお感覚的に把握できる女性の像の中にあられるのである。そして同じように、それを得ようとしてつとめる努力は結局やはり比喩の中に、永遠に女性的なものという神の楯でまもられて、言いあらわしがたいものの形象のシンボルの中に実現されるのである。一般には父なる神、男性的精神の原則の方が価値が高いと見なされていて、マリアと天使の群も恐らくは、とらえ得るものをのりこえてそこへと進んで行くべきなのだ。しかし、詩人が形づくろうと企てた、言いあらわしがたいものの上をそれはただよい、本来的な形態とはならない。それに反して、「永遠に女性的なもの」(12110)は、最高の比喩として、つまり、低いものと高いものという二つの指標を封印しながらやはり又もや形象として姿を現わすのである。このようにここでもまた、低いもの、おぼろなもの、制限されたものという女性的な原理に対する二重関係が確認される。低い女性的な原理から、男性的でダイナミックで弁証法的で精神的なものが派生して女性的原理を精神化し、止揚し、(たとえばノヴァーリスのメールヒュンにおけるように)最後にはもとの女性的原理へもどることで、つくりかえられた姿であられたときには最高のものとし

て、完結させ、またこの女性的原理は母の胎の内で融けたり解体したり、消失したり、あえいだりしながら、より高いもの、純粹なもの、未知なるものに感謝しながらすすんで我が身をささげるほどに自分自身を使い尽してしまうのである。

さて、このように、女性やことばや世界の連関を二重構造³⁰⁾として把握してみると、我々はあのヴェイエトが提出した問題、「性に特有なテーマは存在するか」^⑧という質問に答えを出してみたい気になる。というのも、人間には、バイセクシュアルな精神物理学的な素質があるという指摘はなるほど小さな相違を相対化するのに役立つはするだろうけれど、やはり性に特有なテーマというのは存在するし、人間にとってはこれからしばらくは存在するだろうと思われるからである。これはたとえば妊娠という少なからず重要なテーマが教えているように（男が妊娠するというのは考えられないにしても、レトルトの中で胎児を育てたり、ホムンクルスというのが今後は考えられるのだけれど）肉体的事実にも基いているし、また昔の精神分析がほとんど唯一の解釈図式であると理解していた次のような事実にも基いている。つまり人間はいずれにせよ、これまで、性によって与えられ、しばしば教えこまれたり、強制されたりしてきた異なる特性という意味において、性により異った役割りというものを様式化してきており、そういう風に解釈された性の二元性（能動的—受動的、攻撃的—防禦的、力動的—静止的）を自然や、仕事の世界、文化的利害の解釈にも転用してきたのであり、これは両性具有的な人間性が理想だと考えるのに明らかに以前よりは適した時代になっている我々の時代にあっても止むことはないだろう。

古い天の摂理はもはや存在せず、新しいそれもまだないという「もはやない」と「まだない」との間を我々のようなものはただよいゆれ動いており、かえってそれ故に、古い考え方の中をまるで天から授かった自明さの中にいるように動いている先行者の目にはふれない多くのこと、と同時に、古い考え方をあらわに拒絶することで、自分の心情を示そうとしている、急進的に新しい関係を定立する人たちが気がつかないような多くのことに目をとめることが可能であり、次のようなことをはっきり知っておくべきなのだろう。即ち、これから先もまた性に関して、生物的社会的心理的歴史的に条件づけられた解釈の図式、そして性に条件づけられたテーマは出てくるだろう。それは過去のテーマと対応して、またたとえばドイツ文学が——二、三例をあげると——聖母マリアや騎士の貴婦人、またマリア・マグダレーナやナイトハルトの百姓娘、浮気でやさしいウィーン娘、あるいはみごとに動物的で人を破滅させずにはお

かず、自らも身を滅してしまいうるなどの形象化において、しっかりと保ってきた、あの男らしさとか女らしさとかいうタイプに対応して、そういうテーマは出てくるだろう。ここにはさまざまな高められ、あがめられたものと、生命力にあふれ、低められたものを並べてみたが、我々のグレートヒェンはこの中では多分、小市民的な、ほぼ中間性を内包している。もっとも彼女は崇高な役割から性を強調した役割まで、同時にあらゆる段階を彼女なりのやり方で補完的につつまこんでいるのだが、このことはついでに云っておくと何ら不思議なことではない。なぜなら、まさに標準的典型的な人物はみな結局、「女」のほぼ、あらゆる役割を、我々の考えによれば現存する文明圏の多様な文化によって、またゆっくりとしか変化しない自然によって、我々に与えられた役割を、——そして男の場合でも同様に「男」のあらゆる役割を——演じなければならぬからである。

註

- 1) エミール・シュタイガー『ゲーテ』第1巻1749—1786、チューリッヒ、1952、243頁「グレートヒェンのえもいえぬやさしさ」
- 2) 幼くしてなくなった妹との関係でグレートヒェンが母親の役割をはたしているのを強調した描写を参照のこと。（『ファウスト』第一部 3121—3148行）以下かっこ内のアラビア数字はゲーテ『ファウスト』の詩行を示す。
- 3) ヒルデガルト・エンメル『ゲーテの作品における世界苦と世界像』ワイマール、1957、51頁以下。
- 4) 『人間的な、あまりに人間的な』I アフォリズム、408。
- 5) 『「父親らしいドイツ人」アメリカ女流作家の作品にあらわれた外国人のステレオタイプ』ヴォルフガング・ポールセン（編）『合衆国とドイツ』、ベルン、1976 所収、138頁。
- 6) クノ・フィッシャー『ゲーテのファウスト』第3巻第2版ハイデルベルク、カールハンザー、556頁。
- 7) ゲーテ『ファウスト』エーリッヒ・トゥルンツによる註、ハンブルク、1963、518頁以下。
- 8) 前掲書521頁。
- 9) シュタイガー『ゲーテ』第1巻194頁参照。
- 10) 『ファウスト』4136—4143行参照、引用は伏字の句をうめている、K. R. アイスラー『ゲーテ、心理学的研究』第一巻、デトロイト1963、307頁によった。

- 11) ゲーテ『ファウスト』トゥルンツ 531頁.
- 12) たとえばテオドール・フリードリヒ『ゲーテのファウスト』レクラム, 1932, あるいは, ゲオルグ・ヴィトコウスキー『ゲーテのファウスト』ライプツィヒ, 1908参照.
- 13) 彼女が育てた, 幼くしてなくなった妹の思い出と共鳴していることも考えられる.
- 14) ヴィトコウスキー『ゲーテのファウスト』383頁.
- 15) 評判が, つまり他人がどう思ったり言ったりするかがグレートヒェンの階層ではとても重要であるといつも思っている所以她はファウストにむかって——彼との出会いはむしろ彼女の好奇心をかきたてたという印象を読者はこれ以前に得ているのだが(2778行以下参照)——これまで悪い評判などたてられたことがないのに, 往來で呼びかけられたときにはびっくりして自分の態度にどこかそんな気をおこさせるところがあったのかもしれないと疑ったのだと話している。(3169行以下)
- 16) クノ・フィッシャー『ゲーテのファウスト』599頁.
- 17) シグムント・フロイト, 全集, フィッシャー版, フランクフルト・アム・マイン, 1940, 第7巻 162頁.
- 18) 『生成の無邪気さ』『遺稿』アルフレッド・ボイムラー編第7巻, シュトゥットガルト, 1956, 303頁(クレーナー新書版, 82巻)
- 19) 『人間的な, あまりに人間的な』『漂泊者と影』アフォーリスム 124.
- 20) その上ほんどうのところは, ファウストのどちらの「魂」にも照応しないワーグナーと比較してゲーテの反論が一緒に挙げられており, この反論の中により高い意味がありそうだと思うようになっていく。(1110行以下参照)
- 21) 『屠殺場の聖ヨハンナ』終唱.
- 22) たしかにこのことばはファウストをおこらせるが, 彼の態度は, 事実, 女が捨てられ, はずかしめられ, 罪と罰をおしつけられた者の役割を演じるという, あのくり返し現実化された図式を履行しているのだから, メフィストが, あたりまえの人の考えの枠内, つまりは先を見通すことのできる人の目で, いままさに実現しつつあるものとしてのグレートヒェンの運命をほのめかし, 同時にまた, ファウストの罪を指摘するならメフィストの言うことは, 大体としては正しいのである.
- 23) このファウストによってばかりでなく, 非常に高く評価されている特徴であるナイーブな優美さと, 愛している, 愛していない, というグレートヒェンの花占いに見られる, 独特の素朴さを帯びた幾分子供じみした媚態とを比べてみるとよい。(3179行以下)
- 24) また, グレートヒェン自身が強調しているナイーブできわだった気だてのよさ

や悪意のなさ(3478)を比べるとよい。それは、ついでに云うと、ほかのところ
で同じように彼女が自認している特徴——以前の黒いものをまだまだ黒くぬりこ
めずにはおかなかった性格とか、かつての自分の徳へのほこり(3577—3584)の
ような——とはうまく合致しない。

- 25) 『献詩』参照。
- 26) 合理的な啓蒙主義という意味で、低い感覚的な、つまり美的な能力を、高い精
神的なものから区別し、しかし同時にまた、弱いものにもその権利を認めてやっ
たバウムガルテンの美学に似ている。『レッシング作品集』J. ペーターゼン、
W. V. オルスハウゼン編、ベルリン、23部(神学論集Ⅳ)(反ゲーツ第八部)
236頁参照。
- 27) 前掲書、199—234頁。
- 28) なお、フリーデリケ・エーザーあての若きゲートの手紙(1769, 2, 13)を参
照。この考え方はずっと後に色彩論との関連で発展させられる。
- 29) レッシング『第二訴答』参照。
- 30) ここで、社会的生物学的な基本事実に還元することはせずに、あるいは単に言
語学的な知的な基本構造としてとらえようとして我々が是認しているある構造。

訳 註

1977年4月に「ドイツ文学における主人公及び著者としての女性」というテーマで、
第10回アマースト・シンポジウムがもたれた。この時の報告をもとにまとめられた、
同名の論文集、Die Frau als Heldin und Autorin: hrsg. von Wolfgang Paulsen,
A. Franke AG Verlag Bern 1979. の中からの一篇 Peter Heller, Gretchen: Figur,
Klischee, Symbol を訳出してみた。文学研究のテーマとして、「○○における女
性」といったものは珍しいことではないが、このシンポジウムが従来の研究と異な
るのは、すべてを女の視野から眺めてみようとしていることである。これには勿論、
アメリカにおけるフェミニズムの動きが背景にある。著者のペーター・ヘラーは、
ニューヨーク州立大学(バッファロー)、著書に、『弁証法的ニヒリズム—レッシ
ング、ニーチェ、マン、カフカ論』(1966)、『「最初と最後のこと」フリードリヒ・
ニーチェのアフォリズム研究の註解』(1972) その他ドイツ文学について数多く
の論文がある。

- ① アンナ・ハーレイはこの論文で、オールコットの『若草場語』から、メアリー・
マッカーシー『グループ』、エリカ・ジョング『飛ぶのが怖い』等々の作品に
ドイツ人が、健康で善良で無骨だが、家庭的で子供好き、しかも知的で教養があ
り、弱者に対しては権威をふるわない父親といったタイプで登場することを、分

析，論じている。

- ② 特に性道徳において，男により多く性的自由を認める不分律のことをいう．ここではもっと広い範囲で用いられている。
- ③ この個処は，ワイマール版，コッタ版，ハンブルク版などみな伏字になっていて，ハンブルク版の註でも全然ふれられていない．しかしゲーテの原稿にはあり（ワイマール版異同参照），アルテミス版では伏字になっていない。
- ④ 初期のフロイトは，女は生まれつき知的能力が劣ると主張するメビウスに対して，女の知的未開発性の原因は女の性愛に加えられる社会的禁圧にあり，これがその他の精神的活動をも禁圧するのだと解釈した．（『文明化された』性道徳），しかしこのフロイトの態度はのちには大きく後退する。
- ⑤ 従来「暗い衝動」の *dunkel* は，悪へのうながしというような否定的意味あい
で解されてきたが，まだ明確に意識されていないが，真理を求める衝動と，解されるべきことを，ブルダハ，デュントナー，ヴィーゼなどに依拠して小栗浩氏が
詳細に論じておられる（『ゲーテ年鑑15』「ファウストの死と救済」関西ゲーテ協
会1979 189頁以下参照。）
- ⑥ バウボはギリシャのデメーテルの乳母，デメーテルの姫プロゼルピーナがハデ
スに誘拐されてから猥褻な物語でデメーテルをなぐさめたという．『ファウスト』
では，猥褻な魔女の一人としてワルプルギスの夜の場面に登場する。
- ⑦ この手紙は若きゲーテの思索の跡をたどるのに貴重な資料で，この時期のゲー
テの錬金術への関心がつづられている．ここで著者が指摘しているのは次の一節
であろう．「光は真理ですが，光の源泉である太陽は真理ではありません．夜は
非真理です．そして美とは何でしょうか．それは光でも夜でもないのです．たそ
がれなのです．真実と非真実との所産，中間物なのです．」（『若きゲーテ』第一巻，
ハンナ・フィッシャー・ランベルク編，1963 271頁．）
- ⑧ このアマースト・シンポジウムで Frederick Wyatt は，「性に個有のテーマ
は存在するか，精神分析的指摘とその解釈の問題」という報告を行ったが，時間
的都合でこの論集には間にあわず，掲載されていない。